

世帯内無償労働のジェンダー不平等をどのように把握するか？

——「生活時間のやりくり・組み立て」という新たな分析枠組みの導入——

首都大学東京大学院 柳下実

1 目的・方法・結果

本報告の目的は、家事に費やす「時間の長さ」のみでは捉えられない無償労働の存在を指摘し、それを把握するための分析枠組みを提出することである。加えて、提出した分析枠組みの一部について、探索的に統計手法を用いて分析し、分析枠組みの有用性を検討する。日本の家事労働研究では料理や掃除などに費やす時間の長さの男女差から、世帯内無償労働にみられるジェンダー不平等について検討がなされてきた。そのため世帯内無償労働の「時間の長さ」以外の側面について、日本ではほぼ検討されてこなかった。

アメリカの研究では家事労働からジェンダー不平等を検討する際、家事労働のさまざまな側面に着目する重要性が指摘されている。たとえば家事をすること（「夕食を作る」）と家事を編成すること（「何を作るか決める」）は異なり、前者に費やす時間の長さのみに着目することは、家事の編成を女性がおもに担当しているということを不可視化してしまうことや（Mederer 1993）、「時間の長さ」に着目すると、「管理」という家事労働の側面が捉えられないと論じられてきた。また、「時間の長さ」にのみ着目しては、女性が世帯のスケジュールを調整している点が等閑視されてしまう（Hessing 1994）。つまり、これらの研究の知見は、世帯内で他者の活動が滞りなくおこなわれることを女性が支えており、それらも世帯内無償労働として把握される必要があることを示唆している。

本報告ではこれらを世帯内無償労働の一側面として把握し、こうした労働を捉えるために生活時間のやりくり・組み立てという分析枠組みを提出する。生活時間のやりくりとは、さまざまなタスクをするための時間の捻出を指す。時間の捻出とは、例えば結婚後、朝食を作るために以前より早く起きる、子どもが生まれた後、寝かしつけるために早く寝るなど、起床や就寝など生活の起点となる活動のタイミングをずらすことを指す。そして生活時間のやりくりの結果、パターン化したものを生活時間の組み立てとして把握する。次に本分析枠組みの有用性を検討するため、「生活時間のやりくり」に着目し女性と男性の起床時刻など生活の起点となる時刻が結婚や子どもの出生によって、どのように変動するのかを分析する。東京大学社会科学研究所が2007年から実施している働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査（JLPS）wave 1-7（対象者は2007年に20-40歳）を用い、結婚や子どもの出生によって生活時刻（起床時刻、家を出る時刻、帰宅時刻、就寝時刻）などに生じる変動に男女差がみられるのかを固定効果モデルで分析した。固定効果モデルの結果から労働時間や家事頻度を統制したうえで、子どもの出生により女性は男性よりも就寝時刻を早くしたり、家に帰ってくる時刻を早くしたりしていた。これらは生活時刻を動かすというやりくりを女性が負担していることを示唆する。

2 結論

本報告の知見は、世帯内無償労働を家事に費やす「時間の長さ」からだけでなく、生活時間のやりくりという観点からも把握する必要があることを示唆する。やりくりの多くを女性が担っていることを踏まえれば、研究者が利用している分析枠組みによって女性の世帯内無償労働が過小評価されてきた可能性がある。

文献

Hessing, Melody, 1994, "More than Clockwork," *Sociological Perspectives*, 37(4): 611-33.

Mederer, Helen J., 1993, "Division of Labor in Two-Earner Homes," *Journal of Marriage and Family*, 55(1): 133-45.

謝辞 二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「東大社研・若年パネル調査（JLPS-Y）wave1-7, 2007-2013」（東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト）「東大社研・壮年パネル調査（JLPS-M）wave1-7, 2007-2013」（東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト）の個票データの提供を受けた。